

anuprekṣā における生死

——Bhagavatī Ārāḍhanā を中心に——

河 崎 豊
(大 阪 大 学)

は じ め に

ジャイナ教には anuprekṣā [anup.] (もしくは bhāvanā) という観想法がある。これは出家修行者のみならず、一部の文献では在家信者にも推奨される。⁽¹⁾そこでは、無常 (addhuva)・避難所がないこと (asaraṇa)・孤独性 (egatta)・別異性 (aṇṇa)・輪廻 (saṃsāra)・世界 (loya)・不浄性 (asuitta)・業の流入 (āsava)・業の流入の防護 (saṃvara)・業の消滅 (nij-jarā)・教法 (dhamma)・覚醒 (bodhi) の十二項目が観想され、ジャイナ教徒に相応しい気構えが養われる。本稿の目的は、anup. を生死という点から概観し、もってジャイナ教における生死観の一端を示すことにある。

anup. を取り上げる理由は二つである。一つは、その内容がわが国で一般に「仏教的」とされる見方との類似性を多くの点で感じさせ、本誌読者の多数を占めるであろう仏教学者や仏教徒にとっても興味深い内容を持つと思われるということ、もう一つは、その内容がジャイナ教の生命観、世界観、解脱論を要領よく纏めたもので、当該問題に関するジャイナ教の意識を理解するのに有効な一視点を提供しうることである。

anup. を説く文献は多いが⁽³⁾そのほとんどは日本語で紹介されていない。⁽⁴⁾

ゆえに現状では何を扱っても価値があろうが、今回は anup. に関し纏まった分量を持ち、かつ文献自体が比較的古い時代に成立したと考えられ⁽⁵⁾重要度も高い空衣派代用聖典の *Bhagavati Ārāḍhanā* [BhĀ] を主資料とし、同じく空衣派代用聖典の *Mūlācāra* [Māc] 8 章と、白衣派聖典で唯一 anup. に関し纏まった記述を持つ *Marāṇavibhatti* [Marāṇav] 570-640 に⁽⁶⁾よって補足をする。

無 常 性

まず第一に、我々の世界や我々の存在そのものが無常であるという認識⁽⁷⁾がある。そもそもこの世界自体が泡 (pheṇa, BhĀ 1711) や秋の雲 (sārādiyameha, BhĀ 1723) の如く非恒常的 (anicca, BhĀ 1723) である。我々自身といえ、若さ (jovvaṇa) は川の水のように引き返すことはなく (BhĀ 1717), 寿命 (āṇa) は山の急流の如く去る (BhĀ 1717) 一方で、老い (jarā) は午後の影の如く止まることなく増大し、容姿 (rūpa) は水面に描かれた図形のようにたやすく消滅する (BhĀ 1719)。我々の主権や財産、人との関係性、栄誉、知性など、我々を取り巻く様々な事物や事象も、ことごとく無常であるとして列挙される。⁽⁸⁾

ゆえに、そのような無常な世界に無常な我々があえて何度も留まり続けることを選択する理由はない：「閃光のようにあちこち動き、泡のように虚弱で、病によってかき回され、死によって打ちのめされ、苦によって揺り動かされている世界を知者が観察するならば、どうして〔そんな世界に〕留まることを好むというのか？」(BhĀ 1806)

不 浄 性

また、仏典における不浄観と同様、我々の体は汚れた存在でもあることが強調される。⁽⁹⁾綺麗なもの (subha) はダルマだけであり、アルタやカーマ、そして人間の肉体は汚い (asuha, BhĀ 1807)。肉体は水などで洗っても浄化 (suddhi) されるわけではない。炭を水などで洗っても浄化されないのと同じである (BhĀ 1811≈1038)。身体は「肉と骨と粘液と脂質と血と皮とピッタと腸と尿と腐敗物の小屋であり、多くの苦や病の入れ物」である (Māc 8.34)。ゆえに、そのような不浄な肉体に安楽は存在しない：「肉と骨の集合体にして、糞尿に満ち、9つの裂け目があり、不浄なものを流出しつつある身体にどんな安楽が存在するといふのか？」(Maraṇav 609)

輪廻と苦

このような世界で、無常かつ不浄な我々が生死を繰り返す輪廻は、苦でしかない。そもそも「過去において (kāle 'tidammi), この生きもの (jiva)⁽¹⁰⁾ が無限に生まれたり死んだりすることがあり得ないような、そういう地点は世界に存在しない」(BhĀ 1770) のであり、我々は必ず輪廻を経験してきた。そのような輪廻は「多くの苦という渦を持ち、悪で濁る川」(BhĀ 1784) であり、「認識力のない諸々の生きもの (aṇṇāṇī jivā) は渴きなどの諸々の苦痛 (bāha) に害されながら、大いなる苦の原因である輪廻」(BhĀ 1778) へと入っていく。それは「病に害されている野兎が、『穴がある』と思って大蛇の口へ入っていくようなもの」(BhĀ 1777) である。しかも、輪廻の中で肉体という重荷を運ぶ我々は、「重荷を運びつ

つある男がどこかで荷物を降ろして休息する」(BhĀ 1787) ようには、休息できない。「迷妄 (moha) という漆黒の淵を持つ輪廻という大森林にある悪路で、盲人がさまよう」(BhĀ 1788) 如くである。また輪廻には「老死の恐怖という苦、好ましい人と離れることという恐るべきこと、好ましくない人と結びつくこと、病時の大いなる諸苦痛 (vedaṇā)」(Māc 8.16) があり、「何千もの誕生の中で、脅迫・侮蔑・殺害・緊縛・抑圧・財産の消滅、数多くの病や悲嘆」(Maraṇav 594) を我々は経験してきた。

境遇の可変性

輪廻世界自体が無常である以上、そこでの境遇も流動的である。たとえば、今世の自分の親が来世も自分の親になるとは限らない。「母も妻となり、妻は再び母の状態へと近づき至る」(BhĀ 1793) し、「息子も父となり、父も息子の状態へと近づき至る」(Maraṇav 598)。BhĀ 曰く、誰かが誰かの身内だとか、あるいは敵だというのは、なされるべきこと (kajja) に応じる (BhĀ 1757)。つまり、甲が乙にとってためになること (hida) をすれば甲は乙の親族 (baṇḍhava) となり、ためにならないこと (ahida) をすれば敵 (rivu) である (BhĀ 1758)。母子関係も、「『この子が私を〔老後は〕支えてくれるだろう』と〔思って〕母は息子を養い、息子は『この母親の母胎の中で保持された』と〔思って〕母を養う」(BhĀ 1755) という風に、輪廻のある時点でなされることに基づいた一過性の関係が成立しているにすぎない。

また、「同じ月でも闇夜〔をもたらす新月〕(kāla) は憎まれ、月明かりの夜〔をもたらす満月〕(joṇha) は好まれる」(BhĀ 1804) ように、同じ行動を取っても、それが憎まれる場合もあれば好まれる場合もある。その

ように可變的な状況下では、「過去には全生物 (jaṇa) が全生物の身内だったし、同様に未来には〔全〕生物が〔全〕生物の身内となるだろう」(BhĀ 1751)⁽¹¹⁾。逆に言うと、固定的な形では「誰かの身内とか、あるいは〔そうでない〕者というのは輪廻の中に誰もいない」(BhĀ 1757)。ゆえに、「全ての関係が廻る輪廻 (saṃsāre savve pariyattaṃte hu saṃbaṃdhā)」(BhĀ 1793) の中で住まうことは、「何と厭わしいことか! (dhig-atthu)」(BhĀ 1797) と表現されることになる。

原因としての業

では我々が輪廻し、様々な苦を経験する原因は何か。それは業が己に流入する (āsava) からである。業の流入は「多くの過失という波があり、苦という水棲生物に満ちている誕生という海の中でジューヴァがさまよう原因」(BhĀ 1815) である。それは「海のただ中で〔海水が〕漏れ込んでくる舟に水が〔漏れ込む〕ように、輪廻という海の中で防護されていない者 (asaṃvuḍa) に業という水が漏れ込む⁽¹²⁾」ようなものである (BhĀ 1816. Cf. Māc 8.46≈Maraṇav 619)。

逃げ場無し

もちろん、たとえ業を取得しても、そこから避難できれば問題はないが、それは不可能である⁽¹³⁾。なぜなら、「この世で (iha) 業が赴かない (agama) 地点は生じない」(BhĀ 1733) からであり、「上昇している太陽を妨げる者が世界に誰も存在しないように、発動しつつある (udiraṃta) 業を妨げる者は世界に誰も存在しない」(BhĀ 1735) からである。従って

「退治しがたい業の果報である苦が近づいている時、生・老・病・死・不安・恐怖・苦痛等に対してここで生じ得るような防具 (tāṇa) や避難所 (saraṇa) は、諸々のジークヴァには何もない」(BhĀ 1729-30)。

自己責任という孤独

さらに、業とその果報は、誰かが肩代わりするわけでもない。「地獄などでその〔悪業〕の果報をたった一人で感受する。病気等の諸苦痛を感受しつつあるその者自身の果報を、その者自身〔の血族〕が明らかに観察しつつあっても、何一つ〔対処を〕なさない。そうして、〔その者は〕たった一人で死ぬが、その者に連れ合いは誰も生じない。自身〔の血族〕たちや連れ合いたちは、諸々の享樂を享受することはあっても、業の果報を〔享受することは〕ない」(BhĀ 1742-1744)。端的に言えば、我々は「一人で業を作り、一人で長い輪廻の中でさまよい、一人で生まれ、一人で死ぬ」(Māc 8.9≈Marāṇav 243, 586)。

価値のある生

以上の如く、anup. 部分では生死の繰り返しに対する肯定的な評価は何も見出せないが、裏を返せば、かかる状況から脱することには、大いに価値があることになろう。つまり輪廻を脱するべく奮闘する生だけが、わずかに価値を持つことになる。そしてその唯一の手段は、無論——ジャイナ教文献であるから——ジャイナの教法 (dhamma)⁽¹⁴⁾ に接し、出家者として修行生活を送る以外にない。ジャイナの「優れた教法は、人間に属する世界と神の世界におけるあらん限りの諸善——それら全てと、解脱と、安樂

な事柄とを運んで来る」(BhĀ 1853)ものである。そしてジャイナの教法に従い「輪廻苦を作る業が到来する門を封じ、非難され得ない行があるなら、そういうその者の人間としての誕生は、果報を伴ったものとな」(BhĀ 1857)り、「業を減する原因である正見・正知・正行・苦行が防具となり避難所となる」(BhĀ 1741)。

新業の防護と古業の消滅

具体的には、まず感官の制御や種種の誓戒の遵守を通じ、新たな業の流入を防護する(saṃvara)必要がある(BhĀ 1829-1838)。同時に、既に作られ蓄積された業は、時間の経過と共に自然に果報を結ぶ(kāleṇa pac-camti, BhĀ 1842)⁽¹⁵⁾のを待たず、人為的手段(upāya, BhĀ 1842)——つまり苦行(tava)によって消滅させること(ṇijjarā)が求められる。saṃvaraとtavaは不可分であり、片方のみによる業の消滅はないとされる。tavaなしでのsaṃvaraは「諸々の享受などがないのに、よく保護されている財産が尽きることはない」(BhĀ 1840)ことと、またsaṃvaraなしでのtavaは「流水が入り込みつつあるのに池全体が干上がることはない」(BhA 1848)⁽¹⁶⁾ことと同じである。

人身得がたし

ところが、我々が出家生活を送る機会に極めて得がたいとされる。ジャイナ教で出家するには、少なくとも人間であることが必要だが、人間の状態を得ること自体、「塩水を持つ海の中でくびきと〔その〕留め釘(juga-samīlā)の結合が得がたいように」(BhĀ 1861)⁽¹⁷⁾難しい。たとえ人間に再

生しても、如何なる境遇や資質の人間かが問題である。ジャイナ教が伝播している地方に生まれたか？ 教えを聞いて十分理解し把握しうる知性があるか？ 出家を認可される境遇か？ 厳しく長い修行生活に耐えうる健康や寿命を具えているか？ しかし、「〔ジャイナ教の教義に接するに〕よい地方・家系・容姿・健康・寿命・知性・〔教法を〕聞くこと・〔教法を〕把握することは得やすいものとならない」(BhĀ 1863≈Māc 8.66≈Mar-aṇav 634) し、たとえそれら全てが獲得されたとしても、さらに「ジナの教説における目覚め (bohi) は得やすいものではない」く (BhĀ 1864≈Māc 8.67. Cf. Mar-aṇav 635)⁽¹⁹⁾、「獲得しがたい目覚めが辛うじて獲得された場合でも (kaha vi laddhāe), 放逸になると (pamāijja), 宝の山の頂に苦労して登った後で転がり落ちる」ように、bohi から転がり落ちてしまう (BhĀ 1865)。いったん失われた bohi は「闇を作る海の真ん中に落ちた宝が得がたい」(BhĀ 1866) ように、取り戻し難い。かように、ジャイナ教に接する機会は極めて貴重なものであるからこそ、修行者として生活できる以上はその生を生ききるべきだ、ということなのであろう。⁽²⁰⁾

お わ り に

纏めると以下の通りである—— anup. の主たる目的の一つは、「輪廻の中の生死」からの脱却を目指すべく、生前に経験する様々な事象や、そのような事柄が起こる世界自体が悉く苦であること、そして（特に BhĀ では）それらの原因が業であることを、執拗に観想させる点にある。そのような、輪廻=苦という前提に立つ生や死は、何ら肯定的価値を持たないと言わざるを得ない。しかし、輪廻から脱出するには何かの生を享け何かをしなければならない。そしてそれは得がたい人間の生——しかも、必要な

境遇と資質とを具えた人間の生——を得、さらに得がたいジャイナの教えに接することでしか実現できない。輪廻における生の当事者としての価値は、この限りで肯定的な意味を持つのである。無論、これは他の生存形態を取る存在の生を軽んじるのではない。それは、ジャイナ教文献の至るところで見られる *ahiṃsā* の教義が如実に示している。⁽¹⁾ 他者の生の尊重を前提としつつ、繰り返す生死を厭わしいと見て、ジャイナの出家修行者になるという機会を得れば、それを最大限に生かすべく努力することが求められていると言える。

一方、今回概観した文献中の *anup.* 部分では、死は単に苦と理解され詳しい議論は存在しないが、ジャイナ教が「死に方」について多大な関心を抱いてきたことはよく知られている。*BhĀ* と *Maraṇav* は正に出家者の「死に方」を主題とする。⁽²⁾ 今後の課題として、両文献中の「死に方」の議論を総合的に扱うこと、次いで *anup.* を説く他の文献の記述内容の精査が挙げられる。最後に、今回はあくまでも限定的な文脈における生死観の一点を見たに過ぎない。膨大なジャイナ教文献を渉猟することで、これと異なる生死観を見出す可能性は大いにありえよう。

註

- (1) R. Williams, *Jaina Yoga*, London, 1963, p. 244.
- (2) *BhĀ* 1710=*Māc* 5.206=8.2. Cf. *Maraṇav* 573-574, *Tattvarthādhigamasūtra* 9.7.
- (3) A. N. Upadhye, *Svāmi-Kumāra's Kārttikeyānuprekṣā (Kattigeyāṇuppekkhā)*, Agas, 1960, pp. 1-43.
- (4) 現時点で以下のものを確認したに過ぎない：(1)鈴木重信『耆那教聖典』世界聖典全集刊行會，1920。（*Yogaśāstra* における *anup.* の和訳を含む）(2)谷川泰教「Uttarajjhāyā 研究 I ——第3章と第10章を中心として——」『密教文化』114, 1975, pp. 45-32. (*Kārttikeyānuprekṣā* 中の *Bodhidurlabha-*

- anuprekṣā の和訳を含む) (3)奥田清明「Mūlācāra 第八章 (=Dvādaśānuprekṣādhikāra) と Bārasāṇuvekkhā」『印度学仏教学研究』26-2, 1978, pp. 989-983. (4)奥田清明「『12の観想』」『石上善應教授古稀記念論文集 仏教文化の基調と展開』第一巻, 山喜房佛書林, 2001, pp. 61-89 (*Bārasāṇuvekkhā* の校訂・和訳)。発表時には海外の研究史も概観したが、ここでは割愛する。
- (5) 2世紀頃の成立とする場合が多い (e. g. P. S. Jaini, *The Jaina Path of Purification*, Delhi, 1990, p. 79) が、1世紀に置く説もある (K. Oetjens, *Śivāryas Mūlārādhanā: Ein Beitrag zur Kenntnis der Sterbefasten-Literatur der Jainas*, Hamburg, 1976, pp. 12-25)。なお H. L. Jain, “Śivabhūti and Śivārya,” in: D. C. Jain (ed.), *Jaina Tradition in Indian Thought*, Delhi, 2002, pp. 48-52 も見よ。
- (6) 以下、紙幅の都合から原文の大半を略し、韻律・言語学上の議論も省いた。なお, Śrī Devendrakīrti Digambar Jain Granthamālā 版の BhĀ——現在では入手困難——と筆者が依拠した刊本とでは総詩節数が異なる。筆者の言う BhĀ 1710 は Devendra-版では 1715 詩節にあたり、順次詩節番号がずれる。
- (7) 白衣派聖典の無常観については、拙稿「ジャイナ教白衣派聖典における無常」『印度学仏教学研究』56-1, 2007, pp. 293-288 を見よ。
- (8) BhĀ の無常の anup. 部分 (1711-1723) で何が無常とされ、それがどのように喩えられるかの一覧は以下の通り：(1)神・人・動物を伴うこの世界：泡 (2)威力 (riddhi)：夢見 (suviṇaya-saṃdamsaṇa) (3)安楽な事柄 (sokkha)：閃光 (vijju) (4)境遇 (thāṇa)：水泡 (jalabubbuda) (5)人と人の結びつき (saṃbaṃdhi)：舟に乗り込んでいる者 (ṇāvāgada) (6)頼りとするもの (āsaya)：雲の塊 (abbhasaṃghāya) (7)共住 (saṃvāsa)：道行く人々が日陰に集まること (pahiyāṇaṃ piṃḍaṇaṃ chāhīe) (8)歓喜 (pīdi)：眼差しに秘めた情熱 (acchirāga) (9)生物が一処に集うこと (saṃjoga)：鳥たちが一晩の間一本の木に集うこと (rattiṃ egammi dume saṇṇāṇaṃ piṃḍaṇaṃ) (10)主権・命令・財産・健康 (issariy'-āṇā-dhaṇ'-āroga)：暈 (parivesa) (11)感官 (iṃḍiya)：サンディヤー (saṃjhā) (12)若さ (jovvaṇa)：過ぎ去った川の水 (ṇadijalaṃ adacchidaṃ) (13)寿命 (āuga)：山の川の流れ (giri-ṇadi-soda) (14)柔和さ (sukumāladā)：午前中の影 (puvvaṇha-chāhī) (15)古い (jarā)：午後の木影 (avaraṇha-rukka-chāhī) (16)容姿 (rūva)：水面に描かれた図形 (jale lihidallayaṃ rūvaṃ) (17)熱力 (tea)：虹の熱力 (iṃḍadhaṇu-teja) (18)知性 (buddhi)：流星 (ukkā) (19)力 (bala)：塵の積もった車道にある色・形(?) (rūvaṃ dhūli-kadamba-racchāe) (20)勇気

(vīriya) : 波 (vīcī) ②家屋・寝台・座席・貴重品 (?) (giha-sayan'-
āsaṇa-bhaṇḍa) : 積雪 (himaṇicaa) ②名声や榮譽 (jasa-kitti) : サンディ
ャーに雲が赤く染まること (saṃjh'-abbha-rāga) ③世界 (jagaṃ) : 秋の雲
(sāradyameha)

- (9) 身体の不浄性については、BhĀ では997詩節以下で celibacy と関連せしめられつつ、胎生学的・解剖学的知識を交えてより詳細に説かれる。
- (10) BhĀ において、jīva が「靈魂」を指すのか、あるいは「生きもの」を指すのか判然としない例は多い。BhĀ における jīva の用法は別に検討したい。
- (11) Cf. BhĀ 792. そこでは、このような觀念が ahiṃsā の根拠とされる。
- (12) これについては、榎本文雄「āsrava (漏) の成立について——主にジャイナ古層經典における——」『仏教史学研究』22-1, 1979, pp. 17-42を見よ。
- (13) 奥田「Mūlācāra 第八章」(←註 4) p. 988が指摘した如く、BhĀ の aśaraṇa-anup. 部分は業自体に対する避難所がないことを強調するが、Māc と Maraṇav は業への関心が薄く、業果(死, 老, 病等)から逃れられないことを強調する。
- (14) anup. 内で説かれる dharma の内実について、Māc 8.62=11.5は、kṣānti, mārḍava, ārjava, lāghava, tapas, saṃyama, akiñcanatā, brahmacarya, satya, tyāga の10種類を dharma とする (cf. *Tattvārthadhigamasūtra* 9.6)。一方 BhĀ 1859では dharma は cakra に見立てられ、その cakra たる dharma の構成要素として samyakdarśana, dvādaśāṅga, vrata, tapas が列挙されている。Maraṇav の anup. 部分にこの種の議論はない。
- (15) これについては、谷川泰教「Isibhāsiyāṃ 第9章の研究(II)——Isibhāsiyāṃ 研究III——」『密教文化』173, 1991, pp. 142-119, esp., pp. 137-130を見よ。
- (16) 理論上、時間の経過によって自然と業果は生じ得るから、saṃvara のみでも業滅は可能なはずである。また BhĀ 236≈Maraṇav 54によると、「防護していない者 (asaṃvuḍa) が極めて長大な時間を経て滅する (ñijjar-edi), そういう業を, 防護している (saṃvuḍa) 苦行者は極めて短い時間で滅する」。これは、saṃvara なしでの業滅も可能のように見えるが、ここでの「極めて長大な時間」とは、一生では済まないような長期——業果を来世以降も持ち越すような——を示すものかもしれない。
- (17) samyaktva を得たり、vrata (たとえば ahiṃsā) を守ることは五官と分別を具えた動物でも可能とされる (cf. P. S. Jaini, *Collected Papers on Jain Studies*, Delhi, 2000, pp. 261-263)。一方、人間であっても出家を認可されな

い場合があるが、それについては S. B. Deo, *History of Jaina Monachism*, Poona, 1956, p. 140 を見よ。この概念は、かつて平川彰『原始仏教の研究——教団組織の原型——』春秋社、1964, pp. 495-505 が試みた通り、仏教が規定する出家を認可されない存在の一覧と比較されるべきである。

- (18) これについては谷川「Uttarajjhāyā 研究 I」(←註 4)。古典インド一般の問題としては、原実「インド叙事詩に見られる人間観」『東洋における人間観 インド思想と仏教を中心として』東京大学出版会、1987, pp. 53-81。
- (19) Maraṇav 635 では bohi ではなく supaha 「良い道」。なお bohi/supaha がなぜ得がたいのかの理由は以下の通り——(1) BhĀ 1864, Māc 8.67: 世間は悪い道に満ち (kupadhākulo logo), 激情と憎悪は強力 (baliyā rāga-dosā) だから(2) Maraṇav 635: 迷妄が生起し (mohass' udaa), 悪い道が多く (kupahabahuṇṇattāṇa), 感官の諸領域に対する安楽を貪る (visayasuhāṇaṇ lobha) から。
- (20) BhĀ 780 ではより簡潔に、「人間としての誕生・知性・〔教えの〕聴聞・〔正〕見・〔正〕行を苦勞して得る。苦勞して積み重ねた沙門の状態を、草のように〔取るに足らないものだ〕と看做さずに、お前は捨て去るのを止めよ。」(dukkheṇa labhadi māṇussa-jādi-madi-savaṇa-damṣaṇa-carittam/dukkh'-ajjiya-sāmaṇṇam mā jahasu taṇam va agaṇamto //) と言われる。
- (21) BhĀ では、775-816 に詳細な議論がある。
- (22) Cf. S. Settar, *Pursuing Death: Philosophy and Practice of Voluntary Termination of Life*, Dharwad, 1990. Maraṇav は長らく等閑視されてきたが、最近 C. Caillat, "On the Composition of the Śvetāmbara Tract Maraṇavibhatti-/Maraṇasamāhi-Paiṇṇayaṇ," in: C. Caillat & N. Balbir (eds.), *Jaina Studies: Papers of the 12th World Sanskrit Conference Vol. 9*, Delhi, 2008, pp. 1-32. が発表された。

一次文献

- *Bhagavatī Ārādhana* [BhĀ]: Kailāśacandra (ed.), *Ācāryasrī Śivārya Viracita Bhagavatī Ārādhana*, Solapura, 2004.
- *Maraṇavibhatti* [Maraṇav]: Puṇyavijaya & Amṛtalāla Mohanalāla Bhojaka (eds.), *Paiṇṇayasuttāim Prathamā Bhāgaḥ*, Bambaī, 1984.
- *Mūlācāra* [Māc]: Kailāśacandra (ed.), *Śrīmad-Vaṭṭakerācārya Praṇīta Mūlācāra*, 2 parts, New Delhi, 1999 (4th edition).